

ルアリー・ウア・コンホヴァルと二人の侵入者たち

―中世後期アイルランドの政治的変容に関する一考察―

田中 美穂

はじめに

アイルランドは、一二世紀後半に大きな政治的変容を経験する。いわゆるアイルランドにおける「ノルマン征服」が起ったのである。レンスター王ディアアルミド・マク・ムルハダがイングリンド王ヘンリー二世の許可を得て、ペンブルック伯リチャード・フィッツ・ギルバート・ド・クレア（別称「ストロングボウ」）を娘婿としてアイルランドに招聘したことがきっかけであった。⁽¹⁾以後、イングリンド王の配下にある貴顕たちが次々とアイルランドに到来したばかりか、一一七二―七三年にはヘンリー二世も自らアイルランドの土を踏むこととなった。レンスター王ディアアルミドは、一一六六年にコナハト王ルアリー・ウア・コンホヴァルとの戦いに敗れてヘンリーに支援を求めたのであった。ルアリーは、当時の年代記史料で「アイルランドの上王 (ardri n-Erenn)」⁽²⁾「アイルランド王 (ri-Erenn)」と称される人物であり、一一七五年にヘンリー二世とウインザー条約を締結して、ミーズとレンスター以外を支配地域として保持することにな

る。

当時だけではなく、中世を通じてアイルランドには複数の王がおり、統一王権は存在しなかった。アイルランドは、北西部のコナハト、北東部のアルスター、ダブリンを含む中心部のミーズ、南東部のレンスター、南西部のマンスターと五つの地方に分かれ、各地方の王がそれぞれ存在した。各地方の王の配下にも、より小規模な地域を治める王や有力な一族の王がいた。それゆえ各地方の王は、たとえば「コナハト王」や「コナハトの上王」「上王」は、英語では「king, not king」と記される）というように呼ばれる。さらに、各地方の王のなかで、とくに勢力を誇った王に対しては、ルアリーがそうであったように、「アイルランドの上王」や「アイルランド王」の称号も加えられる。このような称号を与えられた王は、一時的であれ、自分の地方だけではなく他の地方やその地方の王も配下に置くことができた王である。⁽³⁾ 当時、ルアリーが、イングリランド王ヘンリー二世も認めるアイルランドを代表する王であり、権力者であったことは確かである。

本稿では、ルアリー・ウア・コンホヴァルとアイルランドにやって来た貴顕（アイルランド側から見れば「侵入者」）たちとの政治的関わりを彼らの子孫も含めて考察する。具体的には、ルアリーと、「アルスターの征服者」ジョン・ド・カーシー、ヘンリー二世によってミーズに広大な土地を与えられたヒュー・ド・レイシーの三人を取り上げる。ルアリーは当時もともと有力であった現地のアイルランド人の王であり、ジョン・ド・カーシーはイングリランド王権に頼らずに「アルスターの征服者」となった人物であり、ヒュー・ド・レイシーはイングリランド王権を背景にアイルランドの中心部の領主となった人物である。アイルランド側から見れば、彼ら三人はそれぞれ、当時もともと有力であった現地の王、イングリランド王権の意向ではなく単独で侵入した者、イングリランド王権と直接結びついた侵入者として分類できる。しかし、後述するが、後者二人の侵入者とイングリランド王権との関係は次第に変わっていく。本稿で侵入者の代表として、ジョン・ド・カーシーとヒュー・ド・レイシーを取り上げる理由は、彼らが早い段階からアルスターやミーズといった広範囲の領土を獲得した重要な人物であったからだけではなく、イングリランド王権の庇護を得ていたか否かという点で対照的で

あつたからである。また、それぞれルアリーとの接点も認められる。当時の重要人物三名にしばって、彼ら三者三様の複雑な政治的関係をひも解いていくことで、中世後期アイルランドにおけるイングランド勢力による侵攻や支配の実態の一端が明らかになるであろう。

一 「アイルランドの上王」ルアリー・ウア・コンホヴァル

最初に、本稿の中軸となる人物ルアリー・ウア・コンホヴァルについて取り上げるとともに、イングランド王やブリテン島の貴顕たちがアイルランドに侵入する過程にも言及していく。ルアリーは一一一六年頃に生まれ(一一二〇年頃の説もある)、一一九八年に死去した。当時の王としては異例の長寿であつたといえよう。ルアリーは、父トルデルヴァハが一一五六年に死去したことによってコナハト王となつた。ルアリーは、ミーズ、マンスター、レンスター、アルスターとアイルランド全土に遠征に出かけ、各地で人質を取つたり、集会を開いたり、税(牛)を徴収したりしている。一一六六年にはダブリンで「アイルランド(上)王」として即位する。同年、レンスターでディアルミド・マク・ムルハダと戦つて勝利を収めた。一方のディアルミドは、亡命を余儀なくされてヘンリー二世に支援を求めることになつたのである。⁽⁴⁾

ディアルミドはヘンリーの滞在地アキテーヌにまで赴いたが、南ウェールズで兵を募る許可を得ただけでヘンリー自身の直接的な支援は受けられなかつた。一一六七年にディアルミドは、異国人をともなつて帰国した。さらに一一六九年以降、ヘンリー二世の家臣である貴顕たちがディアルミドの招聘によつてアイルランドに渡つて来るようになった。そのなかの一人、ペンブルック伯リチャード・フィッツ・ギルバート・クレアは、ディアルミドの娘婿となることでディアルミドの継承者ともなつたのである。海を越えてアイルランドにやつて来た貴顕たちは、ノルマンディーをはじめとするヨーロッパ大陸やイングランドやウェールズに土地をもつ領主であつた。彼らは、アイルランドで新たな土地を獲得すべくやつて来たのであつた。⁽⁵⁾

海外出身の貴顕たちと戦うことになり、ルアリー・ウア・コンホヴァルは劣勢に立たされた。一一七一年には、同年に死去したディアルミドの跡を継いだペンブルック伯リチャードにダブリンでの戦いで敗れた。家臣であるリチャードがアイルランドで権力をもち過ぎることを警戒したヘンリー二世も、ようやくここに来てアイルランドに遠征することになった。ヘンリーは半年間のアイルランド滞在中に、アイルランドに侵入した自身の家臣たちにイングリッド王の上級支配権を確認させるとともに、アイルランド人の王たちにもかたちだけではあつたが忠誠を誓わせ、彼らを家臣とした。しかし、ルアリーだけはこの時、ヘンリーに服従しなかつた。

それゆえ、一一七五年に両者はウインザー条約を結ぶことになった。イングリッド王ヘンリーの目的は、ペンブルック伯リチャード・フィッツ・ギルバート・ド・クレアのようにアイルランドで権力をもつことになった貴顕たちを牽制することにあつたので、彼らが進出したアイルランド東部（ミーズやレンスター）は王自身の支配領域に置いた。一方、アイルランドの他の地方は、ルアリーに任せるかたちとなった。ルアリーはヘンリー二世を自身の上級領主として認め、ヘンリーに貢納することとなったが、ルアリー自身の本拠地コナハトを含む、マンスター、アルスターといった残りの地方では他のアイルランド人王たちに対して上王ないし上級領主として君臨することができたのである。さらに、ヘンリー二世、つまりイングリッド王権が、貴顕たちのアイルランド侵入に対してルアリーを保護するという取り決めまでなされた。以上、ウインザー条約の内容から、ヘンリー二世が、この時点でコナハト王ルアリーを別格にあつかっていたことがわかる。ルアリーは、他にも多数いるアイルランド各地の現地の王たちに比べて、明らかに優遇されている。

ヘンリーは、自ら南ウェールズの総督に任命したデハイバースのリース・アプ・グリフィズのような役割をルアリー・ウア・コンホヴァルに期待したようであるが、アイルランドでのその試みはうまくいかなかった。つまり、ヘンリーは、ウェールズにおいては北部や辺境地域、アイルランドにおいては東部になるが、要地は自身の家臣に統治させ、他の地域を現地の有力な王に委ねる戦略をとつた。しかし、対抗者がいなくなつたリースと異なり、ルアリーの支配は安定しなかつた。ジョン・ド・カーシーの一一七七年のアルスター侵攻を防ぐことができなかったように、ヘンリー二世に任され

た地域をすべて完全に自身の支配下に置くことはかなわなかったのである。一一七六年にペンブルック伯リチャードが死去したこともあり、ヘンリーはすぐに方針を変え、一一七七年のオックスフォードでの集会で末子ジョンを「アイルランド領主」にすることを決定した。一一八五年のジョン王子のアイルランド遠征は失敗に終わったものの、ウインザー条約でルアリーの支配下に置かれた地域にもヘンリー二世やジョン王子の家臣が派遣され、定住するようになっていく。⁽⁹⁾ルアリーは、一一七〇年代以降、ブリテン島からやって来た侵入者たちと戦う必要が生じたわけであるが、アイルランド人の他の地域の王との戦いや身内同士での戦いにも挑まなければならなかった。高齢に達したルアリーは、一一八三年には息子コンホヴァル・マインマゲにコナハト王位を譲ってコング修道院に隠居した。しかし、一一八五年頃に修道院を出て息子と一戦を交えた。若き日のルアリーは父トルデルヴァハと対立していたが、老いてのち自分の息子とも対立することになったのである。一一八五年から息子コンホヴァル・マインマゲが死去する一一八九年まで、父と息子は争いをくり返した。⁽¹⁰⁾

年代記によると、最晩年、ルアリーは再びコングで修道生活を送っていたようで、一一九八年に同修道院で天寿を全うした。遺体はクロンマクノイズ修道院に運ばれ、そこで埋葬された。上述のように、ルアリーは、彼の死を伝える諸年代記で「アイルランド王」「アイルランドの上王」と称されるのである。⁽¹¹⁾統一王権が存在しなかったアイルランドにおいて、年代記に用いられる称号を文字通りに受け止めることはできない。しかし、ルアリーは、年代記の記述やウインザー条約の内容が証明するように、確かに一一六六年から一一八三年頃まではアイルランド人でもっとも優勢な王であったといえよう。

二 二人の侵入者―ジョン・ド・カーシーとヒュー・ド・レイシー―

次に、ジョン・ド・カーシーとヒュー・ド・レイシーの人物像をそれぞれ見ていく。

ジョン・ド・カーシーは一一五五年頃に生まれ、一二一九年頃に死去した。彼の一族はノルマンディー西部の出身で、一〇六六年のノルマン征服後すぐにイングランドに土地を得てサマセットを拠点としていた。ド・カーシー自身がアイルランドの年代記に記録されるのは一一七七年以降であり、それまでの彼の経歴については不明な点が多い。一一七七年、ド・カーシーはアルスター地方に侵攻してタウンパトリックを占拠し、アルスター東部を支配下に置いた。⁽¹²⁾ それゆえ彼は「アルスターの征服者」と呼ばれる。彼はマン島の王の娘アフレカと結婚し、彼ら夫妻はアルスター地方各地に教会や修道院を建設していく。ド・カーシー家はノーサンプトンシャーやヨークシャーなどにも土地を所有しており、夫妻が創建した修道院がイングランド北部の修道院の娘修道院になるなど、イングランド北部との強い結びつきが認められる。またド・カーシーはスコットランドのギャロウエーの領主たちとも同盟関係にあった。ジョン・ド・カーシー夫妻が創建した修道院のなかにはスコットランドの修道院の娘修道院もあった。⁽¹³⁾ いずれにせよ、ド・カーシーは、ブリテン島においてはイングランド北部やスコットランドとの結びつきが強かった人物であったことがうかがえる。彼がアイルランドで占有したアルスター地方は、アイリッシュ海を隔ててこれらと隣接する地域であった。

アルスター東部を占拠する直前の彼は、ダブリンに駐在するイングランド王ヘンリー二世の軍隊に属しており、アイルランドでの土地獲得を求めてアルスター侵攻に及んだと考えられる。彼が、ヘンリー二世によってアルスター地方の土地を与えられたとか、同地方への侵攻を許可されたとかいう証拠はなく、ド・カーシーはイングランド王権の意向とは無関係に単独行動でアルスターを征服したと推察される。彼はさらにアルスター西部の征服も試みるが、現地の王たちも抗戦したので何度も遠征に失敗し、実現にはいたらなかった。イングランド王ヘンリー二世と続くリチャード一世は、ジョン・ド・カーシーのアルスターでの活動をとくに問題視しなかったようである。リチャード一世にいたっては、彼にアイルランドの監督を任せるなど、むしろ彼を重用している。一方、リチャードの弟ジョン王の時代になると、彼は冷遇されるようになった。ジョン・ド・カーシーとジョン王は対立し、前者は王の許可なしに、表に自身の名前を、裏に聖パトリックの名前と杖を刻んだ硬貨を鑄造していた。ジョン王は彼の勢力を弱めるために、一二〇五年にヒュー・ド・

レイシーの同名の息子を最初の「アルスター伯」とした。「アルスターの征服者」となったジョン・ド・カーシーであったが、イングランド王権公認の「アルスター伯」にはなれなかったのである。彼は前年にこのヒューの息子によってアルスターを追放されており、後にジョン王の赦しは得たものの、ノルマンディーで不遇のうちにこの世を去ったとみられる。嫡出子を残すことはなかった。⁽¹⁴⁾

ヒュー・ド・レイシーは、一一四〇年頃に生まれ、一一八六年に死去した。本稿で主要人物として取り上げる三人のうちでもっとも早く、もっとも若くして亡くなっている。一族は、ノルマンディー地方カルヴァドスのヴィール出身で、曾祖父ウォルターがウィリアム征服王とともにイングランドに移住した。ド・レイシー家は、ブリテン島では、ヨークシャーなどイングランド北部に土地を得た者たちと、イングランド南部に土地を得た者たちと二系統に分かれた。後者に属するヒューは、ウエールズ辺境地域のヘリフォードシャーの土地を所領した。またヒューは、カルヴァドスにも土地を所有していた。アイルランドでは、一一七一年のヘンリー二世のアイルランド遠征に随行し、ミーズに領地を与えられた。ヘンリー二世は、レンスター王ディアルミド・マク・ムルハダの娘婿となったペンブルック伯リチャードにレンスターを、ヒュー・ド・レイシーにミーズをそれぞれ封土として与えたのであった。この時点でヒューは、ヘンリーによってダブリンやウェックスフォードといった主要都市の監督も任された。彼はアイルランドにおいて、イングランド王権を代表する支配者の地位につけられたのである。レンスター王との個人契約によってレンスターの地を支配したペンブルック伯や、のちに単独行為でアルスター地方を征服することになるジョン・ド・カーシーとは異なり、最初、ド・レイシーはイングランド王権と強く結びついていた。

ヒュー・ド・レイシーは、自身がアイルランドで獲得した土地の一部をウエールズのサンソニー・プリマ修道院の所領とした。同修道院は、ヘンリー一世の死後一一三六年に起こったウエールズ人の反乱によって破壊されており、その再建のためにアイルランドの所領から得られる十分の一税などを利用したのであった。またド・レイシーは、サンソニー・プリマに従属する小さな修道院や、ノルマンディーの修道院の娘修道院をそれぞれミーズに創建している。⁽¹⁵⁾ トリム城をは

じめとする城もミーズ各地に建設した。ヘンリー二世に度々呼び出され、イングランド王室で過ごすことも多かったド・レイシーであるが、アイルランドの中心地ミーズを獲得して、アイルランド内での自身の支配権を拡大していった。事実、ヘンリー二世の息子ジョン王子が一一八五年にアイルランドを訪問した際、王子はヒューに対して自分の上級支配権を確立することができず、この訪問自体が失敗に終わったと当時の史料で断言されているのである。⁽¹⁶⁾

しかしながら、ミーズで王のように振る舞ったであろうド・レイシーに対する現地のアイルランド人の反発が強かったことも当然予想される。ジョン王子訪問の翌年、ヒュー・ド・レイシーはダロウで現地のアイルランド人によって斧で暗殺された。ド・レイシーはヘンリー二世の意向を無視してルアリー・ウア・コンホヴァルの娘と結婚していたので、ヘンリー二世はド・レイシーの死の知らせを聞いて喜んだと伝えられる。アイルランドのミーズの地は、ひとまず一一八六年にヘンリー二世によって没収されたが、リチャード一世統治下の一一九四年に、ジョン王子の反抗に対して王リチャードを支援した功績により息子ウォルターに与えられた。また、すでに述べたように同名の息子ヒューはアルスター伯となった。もう一人、(父親の)ヒューとルアリーの娘とのあいだにも息子が誕生している。⁽¹⁷⁾

以上、ジョン・ド・カーシーとヒュー・ド・レイシーの生涯とイングランド王権との関係について簡潔にたどってみた。続いて、彼ら二人の侵入者にルアリー・ウア・コンホヴァルを含めた三者三様の政治的な結びつきについて見ていくことにする。

三 ルアリー・ウア・コンホヴァルと二人の侵入者たちとの関係

(一) ルアリー・ウア・コンホヴァルとジョン・ド・カーシー

最初に、ルアリーとド・カーシーとの関係について検討したい。まず注目すべきは、ルアリーの甥トマルタハ・ウア・コンホヴァルが一一八〇年にアーマー大司教に就任したことである。当時のアーマー大司教区は、アイルランドの首位

司教座の地位を名実ともに獲得しており、アーマー大司教という身分は、アイルランドにおいては最高位の聖職者であることを意味した。M・T・フラナガンによれば、コナハト出身のトマルタハはアルスターにおいては部外者であり、アーマーとの縁故関係もなかった。そんなトマルタハのアーマー大司教就任を承認し、支援したのはジョン・ド・カーシーであった。⁽¹⁸⁾トマルタハは、聖職者としてブリテン島出身の侵入者たちとも友好関係を保ち、ヒュー・ド・レイシーやインゲランドのジョン王子と会うためにダブリンに赴いたりしている。世俗権力者たちのあいだに入って仲を取りもつ役割を担っていたようである。⁽¹⁹⁾詳細は別稿に譲るが、ジョン・ド・カーシーは、アルスターで影響力をもつために同地域の有力な聖職者たちとの親交に努めたようである。多くの教会や修道院を創建したのもその表れであろう。

ルアリーの甥のトマルタハとは友好関係をきずいたジョン・ド・カーシーであったが、年代記によると、一一八八年にルアリーの二人の息子（一人はコンホヴァル・マインマゲ）をともなつてコナハトに遠征したものの失敗に終わっている。⁽²⁰⁾最終的にド・カーシーは、コナハトはおろかアルスター西部にも支配領域を拡大することはなかった。

以上、ルアリーとジョン・ド・カーシーとの関係については、ルアリーの甥はド・カーシーと親交があったものの、両者のあいだでは同盟も友好関係も認められない。一一七五年のウインザー条約締結の際にルアリーがコナハト、アルスター、マンスターの支配をヘンリー二世によって認められたにもかかわらず、ルアリーはド・カーシーの一一七七年のアルスター侵攻を許してしまった。また、ルアリーの二人の息子は、ルアリーの敵であるド・カーシーに味方をして父親を裏切っている。おそらく二人の息子は父親と不仲であったと推測され、彼らに連れられてド・カーシーがコナハトに遠征したということは、ド・カーシーがルアリーを意識した上でコナハト侵略を試みたということになる。しかし、このド・カーシーの試みはコナハトの軍勢によって阻止されたのであった。

(二) ルアリー・ウア・コンホヴァルとヒュー・ド・レイシー

三人のなかでもっとも関係が深いのは、コナハト王ルアリーとミーズの領主ド・レイシーであった。一一七一年には、

ダブリン包囲に失敗し、ペンブルック伯リチャードに敗れたルアリーであつたが、その後もアイルランド各地で積極的
に軍事活動を展開している。同年の一一七一年にコナハトに接するマンスター北部のトモンドを侵略し、翌年には、自身
の拠点であるコナハトのテュアムで聖俗の集会を開催している。一一七三年にはペンブルック伯リチャードがヘンリー
二世によってノルマンディーでの戦いに従軍させられているあいだに、トモンド王ドヴナル・ウア・ブリアンがペンブ
ルック伯リチャードの領地キルケニーを攻撃するが、その際、ドヴナルはルアリーの息子コンホヴァルとともに戦つて
いる。ドヴナルもディアルミド・マク・ムルハダの娘（リチャードの妻となつたイーフェとは別の娘）と結婚しており、
ドヴナルは、一一七一年のヘンリー二世のアイルランド訪問時にも真つ先に王に服従を示したと伝えられる。⁽²¹⁾しかし、
数年後にはドヴナル・ウア・ブリアンはルアリーの息子と協力関係をもつようになったようである。

一一七四年には、ペンブルック伯リチャードがマンスターに侵攻した際、異国人からマンスターを防御するためにル
アリーも大軍を率いて同地に進軍した。両者はサールズ（マンスター地方ティペラリー州）で一戦を交えたが、ルアリー
側の勝利に終わった。アイルランド側の史料によると、異国人はペンブルック伯ら少数のみが生存し、彼らはウォーター
フォードに退却させられた。異国人一七〇〇人がこの戦いで命を落としたという。このときヒュー・ド・レイシーは不在
で、ルアリーはさらにミーズに入り、ダブリンにも侵攻した。しかし、今度はレイモンド・「ル・グロ」・フィッツ・ウィリ
アムらイングリランド側の勢力に阻まれ、ルアリーらがコナハトに退散することになった。とりわけイングリランド側の史
料、韻文『アイルランドにおけるイングリランド人の武勲』では、「傲慢な王」としてルアリーとこのミーズ遠征について
詳述する。ルアリーがド・レイシーの拠点トリム城を攻撃する際にルアリーに同行したアイルランド人同盟者のリスト
まで掲載している。⁽²²⁾以上、ミーズやダブリンを異国人から奪還することはかなわなかったものの、ルアリーは、アイルラ
ンドでのさらなる異国人の侵入は防ぎ、アイルランド勢力の代表として、かなり優勢な状態でウィンザー条約締結に臨
んだことが理解できる。

アイルランドに戻つたヒュー・ド・レイシーは、一一七八年にクロンマクノイズを略奪するために大軍を率いてコナハ

トに侵攻した。しかし、ド・レイシーの軍隊はルアリーが支配するコナハトの軍勢によって撃退される。互いに互いの支配領域に侵攻したルアリーとド・レイシーであったが、どちらも失敗に終わった。その後、一一八〇年頃に両者は同盟を結ぶことになった。イングランド側の史料が、ド・レイシーがヘンリー二世の命令に背いてルアリーの娘と結婚したことを伝える。彼女はヒュー・ド・レイシーの再婚相手となり、二人のあいだにはウィリアム・「ゴルム」・ド・レイシーが誕生する。⁽²⁴⁾この展開は、レンスター王ディアルミドとベンブルック伯リチャードとの関係を想起させる。現地の王の娘と侵入者である異国人との結婚がもたらす同盟関係である。ルアリーとド・レイシーの場合は、対立関係から同盟関係へと転換されたのであって、ヘンリー二世がこのド・レイシーの結婚を背信行為と見なし、アイルランドの監督者からダブリンの監督者へとド・レイシーの役割を制限したとしても、またド・レイシーが一一八六年に死去した際にヘンリーが喜んだとしても不思議ではない。さらにアイルランドにおけるド・レイシーの領地ミーズは、前述のように一一九四年までイングランド王権側に取り上げられることにもなったのであった。⁽²⁵⁾

ルアリーとド・レイシーは、互いに相手の実力を認め合い、対立するよりも同盟した方が双方にとって有利である。とわかつて同盟関係を結んだのであろうか。ド・レイシーはイングランド王ヘンリーの不興を買うことになったが、一一八五年のジョン王子のアイルランド訪問の際もジョン王子に従順ではなかったことから、一一八〇年の時点で、イングランド王権から距離を置くことを決めていたのかもしれない。いずれにせよ、イングランド王の名のもとにアイルランドの監督を任され、アイルランドの中心ミーズに領地を与えられたヒュー・ド・レイシーが、結果的に王ヘンリーを裏切ることになったのである。そして、現地の王ルアリーと侵入者ド・レイシーの関係は、敵対者同士から義父と娘婿の同盟関係へと大きく変化したのであった。

(三) ジョン・ド・カーシーとド・レイシー一族

アルスター地方を征服したド・カーシーとミーズの領主ド・レイシー、両者のあいだには直接対決はない。ド・レイシー

が一八六六年という早い段階で死去したために、ド・カーシーは彼の息子たちと同盟したり、戦ったりすることになるのである。アイルランドの年代記では、まず一九五五年にジョン・ド・カーシーとヒュー・ド・レイシーの息子がともにレンスターとマンスターのイングランド人を征服するために進軍したことを伝える。当時、一八五五年のジョン王子アイルランド訪問の際に随行してマンスター地方のリムリックに土地を与えられ、既述のトモンド王ドヴナル・ウア・プリアンの娘と結婚したウィリアム・ド・バークが、アイルランドに侵入した貴顕のなかで勢力を伸ばしていた。ド・バークを牽制するためにド・カーシーとド・レイシー兄弟が同盟を結んだものと推察される。マンスターで領主となったド・バークは、コナハトへの進出も目指していた。一九九九年や二〇一一年の記録では、ド・カーシーとド・レイシーがコナハトでの権力争いに介入したことも伝えられる。この時はすでにルアリーは死去しており、ルアリーの息子や孫たちの代に変わっている。このように一時期、ド・カーシーとド・レイシーはともに共通の敵と戦っていたのである。結局、一二二〇年代以降、ウィリアム・ド・バークの息子リチャードの代になって、コナハトはド・バーク家によって支配されるようになる⁽²⁶⁾。

ド・カーシーとド・レイシーの同盟は長くは続かなかった。前述のように、リチャード一世の時代にド・レイシー家はイングラント王権と和解し、ヒュー・ド・レイシーの息子ウォルターがミーズの領地を回復した。さらに同名の息子でウォルターの兄弟のヒュー・ド・レイシーが一二〇五年にアルスター伯となるのである。その後、アイルランドの年代記史料は、ド・レイシーとド・カーシーの対立を伝える。ジョン・ド・カーシーは、イングラント王権と再び結びついたド・レイシーによって追い詰められ、ダウンパトリックでの戦いにも敗れ、アルスター西部のアイルランド人の王が支配するテイル・ネオガンに追放されるのであった。最終的にはド・カーシーはノルマンディーで没した⁽²⁷⁾。同名の息子ヒュー・ド・レイシーとしてその地位は安泰ではなかった。彼は、一二二〇年に再度アイルランドに遠征したジョン王によって、一時的ではあれ、兄弟のウォルター・ド・レイシーともども各自がもつミーズとアルスターの領地を没収され、アイルランドからも追放されたのであった⁽²⁸⁾。

おわりに

本稿では、イングランド勢力侵入後のアイルランドの政治的変容について、ルアリー・ウア・コンホヴァル、ジョン・ド・カーシー、ヒュー・ド・レイシー、以上の三人を取り上げて、それぞれの政治的動向や結びつきについて検討した。一二世紀後半のアイルランド中心部のミーズ、北東部のアルスター、北西部コナハトの勢力図の変化を中心にあつかったが、しばしば言及したアイルランド南部のレンスターやマンスターも状況は大きく変わらない。したがって、本稿で得られた結論は、この時期のアイルランド全体の政治的変化についての一般論として述べることができるだろう。結論として、以下の三点を挙げる。

第一に、ルアリー・ウア・コンホヴァルの例を見ればわかるように、当時も現地のアイルランド人の王たちは、相変わらず勢力争いをくり返していた。複数の王たちが互いに対立関係にあるだけではなく、父と子など身内同士の間でも絶えなかった。ヴァイキングの時代もそうであつたが、異国人が侵入してきた際も、自分たちの利害に応じて、異国人と同盟したり、戦つたりしている。一一六六年頃、コナハト王ルアリー・ウア・コンホヴァルは、ヴァイキング時代のマンスター王ブリアン・ボールヴァのように、アイルランドの大半を支配する強力な王になり得たかに見えたが、レンスター王デイルミド・マク・ムルハダが異国人の貴顕たちと同盟し、彼らをアイルランドに移住させたことによって、状況が大きく変わってしまった。

第二に、アイルランドにやつて来たイングランド王の支配下にあつた貴顕たちは、自身の行動によつて、あるいはイングランド王によつて、アイルランドに領地を獲得してアイルランドで勢力をもつようになるが、やはり彼らはイングランド王権の意向によつて左右される存在であつた。一一八五年のジョン王子訪問時に、ジョンがヒュー・ド・レイシーに対して上級支配権を確立することができなかったように、一時的には、アイルランドにおいて貴顕たちがイングランド

王権を凌駕することもあったが、ペンブルック伯リチャードもジョン・ド・カーシーも、ヒュー・ド・レイシーとその息子たちも、イングランド王権によって、アイルランドにおける支配権や領地を奪われたり、制限されたりしている。ペンブルック伯リチャード・フィッツ・ギルバート・ド・クレアは、ヘンリー二世によってその支配領域をレンスターに制限された。ジョン・ド・カーシーは、ジョン王によって「アルスター伯」の称号とともにアルスターでの支配権をヒュー・ド・レイシーの息子によって奪われることとなった。ヒュー・ド・レイシーの死後、彼の息子たちはヘンリー二世の意向によって、のちにはジョン王によって、ミーズやアルスターの支配権を奪われた。彼らは、結局のところ、イングランド王権のその時々戦略によって翻弄される存在であったのだ。

第三に、イングランド王権は、イングランド王の家臣たちがアイルランドで「王」のような勢力をもち出すと、彼らの勢力をそぐべくアイルランドに介入したが、その対策は行き当たりばったりで、当時のイングランド王権がアイルランドにあまり強い関心を抱いていなかったことがうかがえる。ヨーロッパ大陸やウェールズやスコットランドでの軍事活動も展開しなければならなかったゆえに、アイルランドのことは後回しになっていたようである。家臣たちが、アイルランドにおいてもイングランド王の上級支配権に従うことや、イングランド王の威光を尊重することだけで満足していたのではないかと考えられる。結局、当時のイングランド王権の力では、現地のアイルランド人の王たちも、アイルランドに侵入した家臣たちも、完全に押さえつけることはできなかったのである。

注

- (1) 田中美穂「十二世紀後半アイルランドへのノルマン到来——ディアルミド・マク・ムルハダによるストロンングボウ招聘——」『エール』第二五号、二〇〇五年、一三五—一五〇頁。
- (2) この時代のアイルランド側の主要な史料は年代記となる。W. M. Hennessy and B. MacCarthy (ed.), *Annals of Ulster*, 4 vols. (Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies, 1887-1901); W. Stokes (ed.), *The Annals of Tigernach, Revue Celtique*, 18 (1897), pp. 9-59, 150-197, 267-303; S. Mac Airt (ed.), *Annals of Inisfallen* (Dublin: Royal Irish Academy, 1951); Hennessy (ed.), *Annals of Loch Cé*, 2

vols. (London: Stationery Office, 1871); J. O'Donovan (ed.), *Annála Ríoghachta Éireann: Annals of the Kingdom of Ireland by the Four Masters*, 7 vols. (Dublin: Hodges and Smith, 1851; rep. New York: AMS Press, 1966); D. Murphy (ed.), *Annals of Clonmacnoise* (Dublin: Royal Society of Antiquaries of Ireland, 1896; rep. Feinlath: Llanerch, 1993); S. Ó hInnse (ed.), *Miscellaneous Irish Annals*, A. D. 1114-1437 (Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies, 1947). 順に AU, AT, AI, ALC, AFM, AC, MIA を省略する。一六六〇-九八九年のあいだ、ルアリーに対する上記の称号は複数の年代記でくり返し記される。コナハトについて詳しいのは AT (『ディゲルナハ年代記』) であるが、一七八年までで記録が途切れている。AU (『アルスター年代記』) は文字通りアルスター中心、AI (『インスファレン年代記』) はマンスター中心の記録となっている。ALC (『ロホ・ゲー年代記』) もコナハトを中心に記録しているが、一三九〇-六九年の記録が欠落している。AFM (『アイルランドの王国の年代記』) は、一七世紀前半にアイルランド北西部ドニゴール州で編纂されたものであり、過去の主要な年代記の寄せ集めのようにになっているが、内容が詳細である。AC (『クロンマクノイズ年代記』) は、一七世紀の英訳版しか残っていない。MIA (『種々のアイルランドの年代記』) は系統が不明である。以上最後の三つの年代記は同時代性がやや薄く、年代などの誤りも見られるので、使用する際に注意が必要である。各年代記史料の特徴については、田中、前掲論文、一三九頁も参照。

(3)

統一王権が不在であった中世(後期)アイルランドの政治状況については、F. J. Byrne, *Irish Kings and High-Kings* (London: Batsford, 1973; new edn, Dublin: Four Courts Press, 2001), 256-257, 269-274; B. Jaski, *Early Irish Kingship and Succession* (Dublin: Four Courts Press, 2000), 139-142, 227-228; 田中美穂「中世アイルランドにおける『ネイション』意識」法政大学比較経済研究所／後藤浩子編『アイルランドの経験——植民・ナショナリズム・国際統合』(法政大学出版局、二〇〇九年)、三二-七頁。田中「アイルランドとヴァイキング」東北学院大学オーブン・リサーチ・センター「ヨーロッパ・グローバル・リサーチ・センター」の要約、研究プロジェクト報告書Ⅲ(二〇一〇年)、一〇四-一〇八頁。B・ハーヴェー編／鶴島博和・日本語版監修／吉武憲司・監訳『オックスフォードブリテン諸島の歴史 第四巻 一二-一三世紀 一〇六六年-一二八〇年頃』(慶應義塾大学出版会、二〇一二年)、第二章(D・ベイツ著)を参照(筆者は同巻第四章の翻訳と索引等のアイルランド関連の執筆に携わった)。他、本稿で対象とする二世紀後半のアイルランドの政治状況について論じた代表的な研究として、M. T. Flanagan, *Irish Society, Anglo-Norman Settlers, Angevin Kingship Interactions in Ireland in the Late 12th Century* (Oxford: Oxford University Press, 1989; rep. Oxford: Clarendon Press, 1998) が挙げられる。

(4)

AU 1166.9; AT 1166.1, 1166.13; AI 1166.7, 1166.9; AFM 1166.13, 1166.16。ルアリー・ウァ・コンホヴァルについての最も古い研究は、J. G. Flanagan, 'Ua Conchobair, Ruaidrí', in H. C. G. Matthew and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography: in association with the British Academy: from the earliest times to the year 2000* (Oxford: Oxford University Press, 2004) (以下 ODNB を略す), vol. 55, 836-839; E. O'Byrne, 'Ruaidrí Ua Conchobair', in S. Duffy (ed.), *Medieval Ireland: an encyclopedia* (New

York and London: Routledge, 2005) (以下 *MIE* と略す), 466-471; A. Mac Shamhráin, 'Ua Conchobair, Ruaidrí', in J. McGuire and J. Quinn (eds.), *Dictionary of Irish Biography: from the earliest times to the year 2002 (under the auspices of the Royal Irish Academy)* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009) (以下 *DIB* と略す), vol. 9, 572-576 及び 580° Mího Tanaka, 'Ruaidrí Ua Conchobair: the last high king of Ireland', *The Haskins Society Journal Japan*, vol. 4 (June 2011), pp. 39-44 は「年代記史料をもとにルアリーの生涯を簡潔に論じたもの」。

- (5) 田中「十二世紀後半アイルランドへのノルマン到来」一三六―一四三頁。「ブリテン諸島の歴史 第四巻」一三八―一三九、五二頁(第一章 R・フレンチ著)。

- (6) *ACU* 1171.10; *AT* 1171.9, 1171.12; *AI*, 1171.5; *ALC* 1172.1; *AFM* 1171.18, 1171.29; Giraldus Cambrensis, *Expugnatio Hibernica: the conquest of Ireland*, A. B. Scott and F. X. Martin (ed. & trans.) (Dublin: Royal Irish Academy, 1978), 68-69, 78-79, 82-83; Roger of Howden, *Gesta Regis Henrici Secundi Benedicti Abbatis*, W. Stubbs (ed.) (2 vols, Rolls Series, London, 1867), i. 25-26.

- (7) ウィンザー条約のテキストを Roger of Howden, *Gesta*, i. 102-103; idem, *Chronica Rogeri de Houedone*, Stubbs (ed.) (4 vols., Rolls series, London, 1868-71), ii. 84-85; Flanagan, *Irish Society*, 312-313; E. Curtis and R. B. McDowell (ed.), *Irish Historical Documents, 1172-1922* (London: Methuen, 1943), 22-24 に収録されている。なお、ルアリー自身はウィンザーに行かず、使者を派遣した。条約締結に関しては、Flanagan, *Irish Society*, 229-272; Tanaka, 'Ruaidrí Ua Conchobair', 41; 盛節子「ノルマン侵攻とアイルランド王権の対応 一六六―一七七」(『エール』第二九号、二〇〇九年)一八―一八三頁。「ブリテン諸島の歴史 第四巻」七四―七五頁(第一章)、二七七頁(第六章 H・サマソン著)を参照。なお、ウィンザー条約の内容について詳しく伝えているのはイングラント側の史料だけであり、アイルランド側の史料では「年代記の記録をほとんどない状態で、この条約がいかにルアリーや他のアイルランド人の王たちに影響を与えたのかについて一切伝えられていない」。

- (8) R. S. Babcock, 'Clients of the Angevin King: Rhys ap Gruffydd and Ruaidrí Ua Conchobair compared', in K. Jankulak and M. Woodling (eds.), *Ireland and Wales in the Middle Ages* (Dublin: Four Courts Press, 2007), pp. 229-245.

- (9) Roger of Howden, *Gesta*, i.161-165; *Chronica*, ii. 133-136.

- (10) ルアリー父子の対立については *AT* 1136.2, 1143.5; *AFM* 1136.23, 1143.12, 1144.8; *AC* 1139, 1140. ルアリーと息子との対立については *ACU* 1185.8, 1186.5, 1186.8; *ALC* 1186.5; *AFM* 1185.7, 1186.4. なおルアリーは「コンホヴァル・マインマゲ以外の息子とも対立をくり返した」。

- (11) *AI* 1198.2; *ALC* 1198.2; *AFM* 1198.2; *MI* 4, 1198.1. 死の直後、コンケに埋葬されたのか、クロンマクノイズに埋葬されたのかは定かでないが「二一〇七年にはクロンマクノイズで改葬されたという記録がある」(*AFM* 1207.5)。

- (12) *ACU* 1177.1, 1177.5; *AT* 1177.3; *ALC* 1177.1; *AFM* 1177.3; Giraldus Cambrensis, *Expugnatio*, 168-169, 174-181; Roger of Howden, *Gesta*, i.

- 137-138; Flanagan, *Irish Society*, 258-260.
- (13) ルアリー・ウア・コンホヴァル・ジョン・ド・カーシー、ヒュー・ド・レイシー、彼ら三人が創建した教会や修道院、ならびに彼らの教会政策については別稿であつきたい。
- (14) 以上、ジョン・ド・カーシーについては、Duffy, 'The First Ulster Plantation: John de Courcy and the Men of Cumbria', in T. Barry, Frame and K. Simms (eds.), *Colony and Frontier in Medieval Ireland: essays presented to J. F. Lydon* (London: Hambledon Press, 1995), pp. 1-27; Flanagan, 'John de Courcy, the First Ulster Plantation and Irish Church Men', in B. Smith (ed.), *Britain and Ireland, 900-1300* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), pp. 177-178; Duffy, 'Courcy, John de', in *ODNB*, vol.13, 662-664; Duffy, 'Courcy, John de', in *MIE*, 108-109; S. Flanders, *De Courcy: Anglo-Normans in Ireland, England and France in the Eleventh and Twelfth Centuries* (Dublin: Four Courts Press, 2008), 9-19, 134-165; D. Beresford, 'Courcy, John de', in *DIB*, vol.2, 914-915 並参照。
- (15) A. Hogan, *The Priory of Llanthony Prima and Secunda in Ireland, 1172-1541: lands, patronage and politics* (Dublin: Four Courts Press, 2008) .
- (16) *AU* 1185.5; *ALC* 1185.6; *AFM* 1185.6; Giraldus Cambrensis, *Expugnatio*, 204-205, 226-229, 234-237; Roger of Howden, *Gesta*, i, 339; P. Crooks, 'Divide and Rule: factionalism as royal policy in the lordship of Ireland, 1171-1265', *Peritia*, 19 (2005), 274-276; 有光秀行「インクラン宮廷と「ケルト的周縁」——ロジャ・オヴ・ハウデンに着目して——」高山博・池上俊一編「宮廷と広場」(刀水書房、二〇〇二年)(有光『中世ブリテン諸島史研究——ネイション意識の諸相——』刀水書房、二〇一三年、一一九—一二六頁に再録) 五七頁。
- (17) *AU* 1186.4; *AFM* 1186.5; Roger of Howden, *Gesta*, i, 350; 以下、ノート・エ・ノベーンに引く。W. E. Wightman, *The Lacy Family in England and Normandy 1066-1194* (Oxford: Oxford University Press, 1966); Flanagan, 'Lacy, Hugh de', in *ODNB*, vol.32, 184-185; D. M. Wiley, 'Lacy, Hugh de', in *MIE*, 256-257; Hogan, *The Priory of Llanthony Prima*, 23-24, 45-50; Beresford, 'Lacy, Hugh de (I)', in *DIB*, vol.5, 261-262 並参照。ノート・エ・ノベーンに引く。以下同。以下、ノート・エ・ノベーンに引く。Smith, 'Lacy, Hugh de, earl of Ulster', in *ODNB*, vol. 32, 185-187; Flanagan, 'Lacy, Walter de', in *ODNB*, vol.32, 201-203; Beresford, 'Lacy, Hugh de', in *DIB*, vol.5, 262-263; idem, 'Lacy, Walter de', in *DIB*, vol.5, 264-265; C. Yeach, 'King and Magnate in Medieval Ireland: Walter de Lacy, king Richard and king John', *Irish Historical Studies*, Vol. 37, No. 146 (November, 2010), 184-185 並参照。
- (18) Flanagan, 'John de Courcy, the First Ulster Plantation and Irish Church Men', 171-172.
- (19) Beresford, 'Ua Conchobair, Tommalach', in *DIB*, vol.5, 579-580.
- (20) *AU* 1188.6; *ALC* 1188.7; *AFM* 1188.8.
- (21) *AT* 1171.5, 1171.9, 1173.10; *AFM* 1171.18; Flanagan, 'Ua Briain, Donnall Mór', in *ODNB*, vol.55, 829-830; M. Ní Mhaonaigh, 'Ua Briain,

- Domnall Mór', in *DIB*, vol. 9, 555-556.
- (22) *AT* 1174.9; *AFM* 1174.10; Giraldus Cambrensis, *Expugnatio*, 94-97, 138-141, 162-165; 『ノールマンズとイギリス人の武勲』の該節箇所を『The Deeds of the Normans in Ireland: *La Geste des Anglais en Irlande: a new edition of the chronicle formerly known as The Song of Dermot and the Earl*, E. Muldally (ed. and trans.) (Dublin: Four Courts Press, 2002), 135-136. *AT* 1178.3; *AFM* 1178.8.
- (24)(23) Roger of Howden, *Gesta*, i. 270; Flanagan, 'Household Favours: Angevin royal agent in Ireland under Henry II and John', in A. P. Smyth (ed.), *Seanchas: studies in early and medieval Irish archaeology, history and literature in honour of Francis J. Byrne* (Dublin: Four Courts Press, 2000), 368-369; C. Veach and F. V. Veach, 'William Gorm de Lacy: "chiefest champion in these parts of Europe"', in Duffy (ed.), *Princes, Prelates and Poets in Medieval Ireland: essays in honour of Katharine Simms* (Dublin: Four Courts Press, 2013), 63-84; 有光『前掲論文』五七頁。
- (25) Giraldus Cambrensis, *Expugnatio*, 234-235, 250-251; Roger of Howden, *Gesta*, i. 350; idem, *Chronica*, ii. 253-254; William of Newburgh, *Historia Rerum Anglicarum*, R. Howlett (ed.), *Chronicles of the Reigns of Stephen, Henry II and Richard I* (4 vols., Rolls series, London, 1884-89), i. 239-240; Flanagan, *Irish Society*, 282-283. ノールマンズとイギリス人の武勲 一四四年にジョン王子が兄リチャード王に反抗した事、王がノールマンズとイギリスの代理としてノールター・ヒ・レーンバーン・カーシーを任命した。Flanagan, 'Household Favours: Angevin royal agent in Ireland under Henry II and John', 375-377.
- (26) *AU* 1195.7, 1201.5; *ALC* 1195.3, 1201.8; *AFM* 1195.7, 1199.10; *MIA* 1201.5; H. Petros, 'Crossing the Shannon Frontier: Connacht and the Anglo-Normans, 1170-1224', in Barry, Frame and Simms (eds.), *Colony and Frontier in Medieval Ireland*, 122-123, 126-131; Crooks, 'Divide and Rule', 277-281, 285-287, 289-301; Flanagan, *De Courcy*, 162-163; 『ノールマン諸島の歴史 第四巻』五二一-五三三頁(第一章)。
- (27) *AU* 1204.3, 1205.3; *ALC* 1204.9, 1204.10, 1205.5; *AFM* 1203.5, 1204.2; *AC* 1203; *MIA* 1203.6, 1204.1, 1206.3; Roger of Howden, *Chronica*, iv. 176; Flanagan, *De Courcy*, 163-165.
- (28) *AU* 1210.2; *AI* 1210.2; *ALC* 1210.4, 1210.5, 1210.6; *AFM* 1210.5; *AC* 1208 or 1209 (この年代記では年代がずれている); *MIA* 1210.1, 1210.2, 1210.3; William of Newburgh, Howlett (ed.), *Chronicles*, ii. 511; Veach, 'King and Magnate in Medieval Ireland', 201-202.

本稿は、二〇〇九～二〇二二年度科学研究費補助金・若手研究(B)・研究課題「中世後期アイルランドの政治的変容に関する考察」(課題番号二七二〇二七九)による研究成果の一部である。

Ruaidrí Ua Conchobair and Two Invaders: A Study of the Political Change in the Later Medieval Ireland

Miho Tanaka

Ireland had to have the political change after English power reached there in the latter half of the twelfth century. Ruaidrí Ua Conchobair, was the most powerful king in Ireland then. John de Courcy, 'the conqueror of Ulster' and Hugh de Lacy (d. 1186), who was given the extensive land in Meath by Henry II, were the invaders for Irish. Native Irish kings and foreign raiders not only fought but allied one another occasionally.

Ruaidrí, called 'the high king of Ireland' by Irish annalists, concluded the treaty of Windsor with Henry II in 1175 and Henry II left him to rule Connacht, Ulster and Munster but he could not prevent John de Courcy from invading into Ulster in 1177. After Ruaidrí has fought with Hugh de Lacy in 1170's, a daughter of Ruaidrí married to Hugh de Lacy around 1180. This alliance between Ruaidrí Ua Conchobair and Hugh de Lacy made Henry II unpleasant.

This paper considers the political relationship among Ruaidrí Ua Conchobair, two invaders, John de Courcy and Hugh de Lacy. The real circumstances of the political change of the later medieval Ireland will emerge by analyzing the each relationship of these three influential persons.